

幼児の評価伝染における推論過程の検討

(中間報告)

奈良教育大学 次世代教員養成センター 残 華 雅 子

Examination of preschoolers' reasoning process underlying evaluative contagion

Teacher education center for the future generation, Nara University of Education,

ZANKA, Masako

要 約

これまでの研究から、幼児が行為者に対する評価を、その行為者と同集団に属する他者にまで拡大し、同じ評価を予測することが示されている（評価伝染）。本研究ではこの評価伝染について 2 つの目的から検討を行う。まず、行為者に対する、特定領域における評価と、全般的な印象評価のどちらが同集団他者の評価として伝染しているか明らかにする。次に、子どもが行為者とその同集団他者の関係性を考慮して、行為者の評価を同集団他者の評価としているか検討する。以上の目的から、本研究では他者への信頼性評価における評価伝染から検討を行う。まず異なる領域において能力の高い行為者と、各行為者と同集団の他者を提示する。そして同集団の行為者の能力が高かった領域においてのみ、その他者の能力が高いと予測するか検討を行う。半数の参加児は友人同士のグループ間で評価伝染が生じるか検討する。半数の参加児は、初対面同士のグループ間で評価伝染が生じるか検討を行う。

【キー・ワード】 幼児、評価伝染、選択的信頼、社会集団

Abstract

The phenomenon in which children extend their evaluation of one actor to their associates, such as social group members, is called evaluative contagion. The first objective on this study is to determine whether children evaluate the actor's group member based on the evaluation of the actor's traits on a specific domain or the evaluation of their overall impression of the actor. The second objective is to explore whether the children extend their evaluation of an actor to their group members based on their association. In the experiment, children are shown a video of two models displaying competence in one of two domains (knowledge or strength). They are then introduced to two new models belonging to the same social group as the original models. The new models are introduced either as friends of the original two models or as meeting the models for the first time. In the test trial, children choose which of the two new models they consider more

competent on a task of strength and knowledge.

【Key words】 preschoolers, evaluative contagion, selective trust, social group

目 的

Olson, Dunham, Dweck, Spelke & Banaji (2008) は、子どもがある行為者に対する評価を、家族や社会集団のメンバーなど、その行為者の仲間を広げること示し、これを評価伝染 (evaluative contagion) とした。例えば、Olson, Banaji, Dweck, & Spelke (2006) は、平均年齢 6 歳の参加者に対し、2 人の人物について、一方の人物は運が良かったというストーリー、もう一方の人物は運が悪かったというストーリーを提示した。実験の結果、参加児は運が良かった子どもを運が悪かった子どもよりも好むようになることを示した。更に参加児は運の良かった人物と同じ集団の他者を、運の悪かった人物と同じ集団の他者よりも好むようになった。つまり、参加者がもつ、運が良かった/悪かった当事者に対する評価が、その人物と同じグループに属する他者にまで拡大され、当事者と同様に同グループの他者が評価されたのである。また、同様の結果は意図的な行動でも生じ、意図的に良い行いをする人物と同グループの他者を、意図的に悪い行いをする人物と同グループの他者よりも好むようになることも明らかにした。

評価伝染は未就学児においても見られている。Barth, Bhandari, Garcia, MacDonald, & Chase (2014) は、4 から 5 歳児を対象に子どもにとってなじみのある対象物 (e.g., コップ) に対して、誤った情報を述べるモデル (e.g., コップに対し「あひる」と述べる) と、正しい情報を述べるモデル (e.g., コップに対し「コップ」と述べる) を提示した。そして、正しい情報を述べていた人物と同集団に属する他者に対して、誤った情報を述べていた人物と同集団に属する他者よりも、信頼を示すことを明らかにした。この他にも Skinner, Meltzoff, & Olson (2017) は 4, 5 歳児に対し、他者から好意的な態度を向けられているモデルと否定的な態度をとられているモデルを提示した。そして、好意的に扱われたモデルの親友に対して、否定的に扱われたモデルの親友よりも選好を示すことを明らかにした。

本研究ではこの評価伝染の背景にどのような推論過程があるか、特に 2 つの目的から検討を行う。第 1 の目的は、行為者の何に対する評価が、他者に拡大されているかを特定することである。そして特定領域における行為者の特徴に対する評価が他者に拡大されているという仮説と、行為者に対する全般的な印象が他者に拡大されているという 2 つの仮説のうち、どちらが支持されるか検討を行う。

第 2 の目的は、子どもが行為者と同集団他者の関係性を考慮した上で、評価を拡大しているか明らかにすることである。これまでの研究では、5 歳児でも、どのような社会集団であるかを考慮した上で、その集団で共有されている知識を予測することが示されている (Lieberman, Gerdin, Kinzler, & Shaw, 2020)。このことを踏まえると、幼児が 2 者の関係性を考慮した上で、集団間で同じ特徴を共有していると予測する可能性が考えられる。そのため本研究では、友人同士のグループの 2 者間では評価伝染が生じるが、他者に割り当てられた初対面同士のグループの 2 者間では評価伝染が生じないと仮説を立て、検討を行う。

以上の2つの目的から、実験ではHermes, Behne, Bich, Thielert, & Rakoczy (2018)の実験パラダイムを参考に、言語知識領域において能力の高いモデルと、運動領域において能力の高いモデルを提示する。そしてその後、新たなモデル2名がそれぞれどちらかのモデルと同グループであると紹介される。この時、半数の参加児は同グループの2名は友達同士であると説明され、半数の参加児は同グループ2名が初対面であると説明される。そして、先のモデルが能力の高かった領域において、同グループのモデルは能力が高いと予測するか、検討を行う。

方法

参加者

3歳児、4歳児、5歳児を対象に検討を行う。

手続き

フェーズ1では映像上で女性のモデル2名を提示する。第1のモデルは身体能力の高いモデルとして重たいものを持ち上げて見せる(e.g., トランクを持ち上げる)。第2のモデルは知識の豊富なモデルとして、対象物に対して詳細な名前を述べる(e.g., ドレスに対して「カクテルドレスだ」と述べる)。各モデルについて3試行ずつ能力の高い場面を見せた後、確認課題を行う。確認課題では参加児に対し、力持ちだったのはどちらかと、物知りだったのはどちらかについて尋ねる。

確認課題後、フェーズ2に移る。フェーズ2では新たに第3、第4のモデルを提示し、映像上の実験者が第1と第3のモデルが同グループ、第2、第4のモデルが同グループになるように割り当てる。続けて第1と第3のモデルのグループと、第2、第4のモデルのグループそれぞれに対して「あなたたちは知り合いですか?」と尋ねる。友達条件では第3・第4のモデルが同グループのモデルについて「一番仲のいい友達である」と述べ、初対面条件では「初対面で、今まで会ったことがない」と述べる。

テストフェーズは身体能力課題と知識課題をそれぞれ行う。身体能力課題では実験者は第4・第5のモデルの間に重たいものを提示しながら、「これを運べるのはどちらか」を尋ねる。知識課題では子どもが見たことのない対象物を提示しながら、「これの名前を知っているのはどちらか」を尋ねる。各課題3試行ずつ行い、子どもがどちらのモデルを選択したかを指標として用いる。

倫理的配慮

本研究は実験内容と目的を園に説明し、事前に了解を得て実施する。また著者の大学内の倫理審査の承認を得た上で研究を実施する。

引用文献

- Barth, H., Bhandari, K., Garcia, J., MacDonald, K., & Chase, E. (2014). Preschoolers trust novel members of accurate speakers' groups and judge them favourably. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, *67*, 872-883.
- Hermes, J., Behne, T., Bich, A. E., Thielert, C., & Rakoczy, H. (2018). Children's selective trust decisions: Rational competence and limiting performance factors. *Developmental science*, *21*, e12527.
- Olson, K. R., Banaji, M. R., Dweck, C. S., & Spelke, E. S. (2006). Children's biased evaluations of lucky versus unlucky people and their social groups. *PSYCHOLOGICAL SCIENCE-CAMBRIDGE*, *17*, 845-846.
- Olson, K. R., Dunham, Y., Dweck, C. S., Spelke, E. S., & Banaji, M. R. (2008). Judgments of the lucky across development and culture. *Journal of personality and social psychology*, *94*, 757-776.
- Skinner, A. L., Meltzoff, A. N., & Olson, K. R. (2017). "Catching" social bias: Exposure to biased nonverbal signals creates social biases in preschool children. *Psychological Science*, *28*, 216-224.